

● Dr. 井上林太郎の書籍紹介

がん細胞から学んだ生き方ー「ほっとけ 気にするな」のがん哲学ー  
樋野興夫 著 へるす出版 2021年11月初版



はじめに

昨年に続き、今年度も12月9日と16日、地元安浦中学校でがん教育を行った。まず、がんの発症メカニズム、統計などの総論、次に、乳がんを例に、検診、特にセルフチェックの大切さ、早期発見、早期治療が重要なこと、そして子宮頸がんワクチンについて、最後に、私の体験談を少々である。ほぼ昨年と同じで、変えたことは、子宮頸がんワクチンが、2022年4月から「積極的な勧奨」が再開するのに伴い、女子生徒にはその案内が届くという内容だけだった。

本書の著書、樋野先生も2016年から3年間、東京都文京区の小学校と中学校で、「がん教育」の授業を行われた。本書の中にも、「がん教育はなぜ必要か？」という章があり、私の「がん教育」に不足していた大切なことがあったので、紹介したい。

著者の紹介；樋野興夫（ひの おきお）

1954年島根県生まれ。順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授を経て、現在、同大学名誉教授、新渡戸稲造記念センター長、順天堂大学医学部客員教授等併任。

2013年に一般社団法人「がん哲学外来」を開設し、がん患者と家族を対話を通じて支援する活動を続けておられる。

本書の内容・感想

2007年「がん対策基本法」が施行され、同年「がん対策推進基本計画」が制定された。その中に、「子どもに対しては、健康と命の大切さについて学び、自らの健康を適切に管理し、がんに対する正しい知識とがん患者に対する正しい認識をもつように教育することを目指し、5年以内に、学校での教育の在り方を含め健康教育全体の中で、がん教育をどのようにすべきかを検討し、検討結果に基づく教育活動の実施を目標とする」とある。そして、2012年第2期、そして、2017年第3期がん対策推進基本計画が制定された。第3期には、「外部講師の活用体制を整備し、がん教育の充実に努める」とある。このような流れを経て、文部科学省(文科省)は、小学校では2020年度から、中学校は21年度から、高校は22年度から「がん教育」を始めることを決めた。

文科省は15年、「学校におけるがん教育の在り方について」を発表。「がん教育」の目標の1つとして、「自己のあり方や生き方を考え、共に生きる社会づくりを目指す態度を育成する」とある。

では、実際にどのような授業をすれば良いのか。本書には、そのヒントがあったので、少しだけ紹介する。

『予防を中心にがん教育が行われている。実際に以前と比べると、予防意識は向上している。しかし、現実には2人に1人ががんになっている。「がんは予防できない」と考えた方が現実的である。(中略)だから、小学生や若い人達に身につけて欲しいのは、予防よりも心構えだ。予防の知識だけ覚えても、家族などががんになったときの心構えがなければ本末転倒だ。現実に向き合える「がん教育」でなければならないと考えている。』ー「がん教育」は、予防より心構えー

『「がん教育」で大切なことは「がんになった人は、決してかわいそうな存在ではない」ことを教えること

だ。2人に1人がなる病気に対して、同情や哀れみという感情は正しくない。しかし死を意識する病気であることは確かだ。

家族ががんになったらどう接すればいいのか。同級生ががんになったら教室でどう接すればいいのか。ともすれば、同情や哀れみになってしまう繊細なものだ。ここを乗り越えるためには、先生方は自分の人生観を真正面から、子ども達にぶつける必要がある。』－先生の言葉に心がこもっていれば－

『今後、皆さんの周りにがんなどの病気で悩んでいる人が現れると思う。その時のために、今から困っている人に手を差し伸べられる練習をしておくといいと思う。困っている人がいたら、自分には何もできないと思っても、会話がなくても、ペットの猫や犬のようにそばにすることが、実はとても大事なのだ。』－子ども達の質問の例－

『自分や家族などががんになったときに、そのがんはどう向き合うかという心構えを身につけておくことも大切だ。(中略)小学生の子どもをもつお母さんが、がん告知を受けた。元気がないお母さんを見ることほど、子どもにとってつらいことはない。ところが、がんにならずにお母さんが前を向いて頑張り始めると、子どもは勇気づけられて、「自分もしっかりしなくちゃ」と考えるようになる。これが本当の「がん教育」だ。

解決できない状況に立たされた人が、それでも前向きに歩き出すとその姿に人は感動する。この感動こそが、真の人間教育だ。がんになった親の姿を見て、子どもは人間を学んでいく。患った親がどのように子どもに生き方を伝えるか。与えられた現実を、いかに子どもの教育にするのかを考える時代を迎えている。』－親が前を向いている姿に、子どもは－

本書を参考にして、来年度の「がん教育」では、「心構え」を取り入れることにした。さらに、「がんにかかったお母さん、お父さん」に会う機会があれば、子どもさんは親の姿をみて成長されていることを、まさに今「がん教育」を実践されていることを伝えたい。

理事 井上 林太郎